



しかもこのような感情は、日本国のことだけではなく、世界全体にあって、大戦後二十五年にしていまだに戦火が熄まず、ヴェトナム

七〇年といっても、十年単位のもことに小さい節にすぎないのだが、一九七〇年あるいは一九七〇年代がことさらにクローズアップされるのは、日本人にとっては、安保や沖縄や大学の問題を目前に抱えているからだけではなくそれらを含めたよりマクロな時代の動きの節の上の、あたかも不安定な踏み台の上に立っているような、緊張感と焦燥感、そしてその裏返しとしての期待感が、いわば日本人の共通感情として渦巻いているからであろう。

ム、中東を含めた、あらゆる東西、南北問題、中国問題、アフリカ、中南米の後進地域の問題など、もう少し何とかならないだろうかと、当事国の人たちのみならず、世界のすべての人たちが、七〇年代に賭ける気持が強いのである。しかも止まるところのない科学技術と情報社会化の進行とが、世界の矛盾の状況を拡大して写し出しているのである。

七〇年あるいは七〇年代の出版を考えるには、やはりこのような背景を抜きにしてはできないと思われる。また、日本の出版界が、大小の問題を持ちこしてきており何とかしなければという、出版・取次・小売の全出版人の焦燥が急激に高まっている状況はまさしく同じなのである。そしてそれが、情報社会化の波に洗われて、おおい難く露出しているのである。六九年もおしつまって、日本の出版界の明日を占うような二つの出来事があった。

一つは出版と取次と小売の三者

合併という形で、全日本ブッククラブが設立されたこと。もう一つは、旭屋書店と紀伊国屋書店の合併で、大型店舗の開店が大阪梅田駅前で行われたことである。いずれも、六九年と七〇年のつながり時期に、しかもどちらも、ある意味では業界の一方の批判や反対がありながらも、結果として成立したということは、象徴的であると思う。この二つのものが、七〇年代にどのような発展の経路を辿ってゆくか、また、その刺激を日本の出版界がどのように受けとめてゆくかは、情報化時代の出版の姿を問う、有力な実験にもなると思われる。

二年ほど前のこのクラブ会報に「コンピュター革命と出版」という表題の小文を書いたことがあるが、そこで予想的に述べたことのうち、出版に関係するアメリカと日本の企業の提携が既に相当なスケールで具体化しているし、また、クラブが主催してコンピュターと出版に関するセミナーが開

られるなど、情報化時代の出版を模索し指向する動きは、ここで急に高まっている現況である。出版社の企画においても、レコード全集出版を各社が競い、語学教育のカセットを出版社が作り、書店が売って、カセットブームなどといわれるものもここ一、二年のことである。

しかし、そのような動きに、具体的に参画している出版人はいまだ少数であって、出版、取次、小売を通じて大多数の出版人は、いわばオブザーバとしてあり、しかし、情報化時代の波に洗われて、日本の出版界も曲り角に立っているという実感、ある場合には、足をすくわれそうな危機感がある、といっても過言ではないと思われる。

出版界の合理化の問題にしても、単に現状の矛盾やムダを省いて、いわゆる三者の共栄を計ることも重要であるが、将来をある程度見透した上での議論の方向づけが要求されると思う。

楽観論にせよ、悲観論にせよ、将来に対する確信がないままに、あるいは不安があるがままに、議論が硬直化するケースも考えられるのである。

もちろん七〇年代の出版、情報化時代の出版について、私自身、

(平凡社社長・出版クラブ常任理事)

新春評論

出版・一九七〇年

下 中 邦 彦



第 59 号

主な記事

- △新春評論▽
 - ▽出版・一九七〇年
 - ▽紙上名刺交換―一九七〇年への出版人の声―
 - ▽春をうたう
 - ▽ " "
 - ▽出版クラブの誕生(2)
 - ▽出版歳時記・来年と鼻の穴
- 下 中 邦 彦 一
二 五
角 川 源 義 三
尾 張 真 之 介 四
福 岡 真 寸 夫 五
江 草 四 郎 七
八

各様の情報を学び、各様の動きにぶつかりながら模索しているのが本音である。しかし、例えばカセットにしても、本と同じ出版社が出版し、同じ著者、編集者が制作するのであって、単に活字が音声に、紙がテープになったものに見れば簡単であるし、書店にしても、同じ本の顧客に売るのである。要するに、一番簡単に割り切れるところから入ってゆくの、もっとも実質的であると思う。

情報化時代の成長産業の一つは出版業であるという、ある週刊誌の記事を見て、単純に喜んでいられるわけにはゆかないが、出版業といっても、情報産業といっても、いずれもが頭脳や知識の仕事であることには変りはない。コンピュターがかりに絵を画いたり、音楽を作曲しても、小説や論文を書くのは大変だ。いかに情報化時代が進んでも、紙が合成紙やテープや映写板になっても、活字がある場合、音や記号やらに置きかえられても、印刷が電波になっても、情報を人間の個性によって組み立てるという出版の本質に変わりはないと考えるのである。

要するに、情報化時代の流れの中で出版のもっている本質の機能を縦横に動かすこと、出版業界の築き上げてきた組織と力を生かすこと、この二つの前提をふまえて、一九七〇年を迎えるにあたって、もちろん私を含めた日本の全出版人の繁栄を心から願うのである。